

## 1605年慶長大津波の際の四国の地震動

神戸大学名誉教授 石橋 克彦\*

Earthquake Ground Motions in Shikoku, Southwest Japan, at the Time of the 1605 Great Keicho Tsunami

Katsuhiko ISHIBASHI

Emeritus Professor, Kobe University

I examined historiographically the ground motions in Shikoku Island due to the 1605 Keicho earthquake, which is still obscure and seems a key for elucidating the true nature of this event. The earthquake produced great tsunamis on the Pacific coast of central and southwest Japan, but was unfelt in Kyoto and Kagoshima, and its source region has not been clarified yet. I selected three rank-A or A' (contemporary or semi-contemporary) and seven rank-B (written in the late 17th and 18th centuries) historical documents suggesting the ground motions of this event in Shikoku through careful source criticism. An epigraph of the Keicho tsunami monument in southeast Shikoku and a local record in southwest Shikoku, both of which describe tsunami attack on unprepared inhabitants, suggest the earthquake was almost unfelt at these places. Although an expression "earthquake and tsunami" appears in several documents in later times, it seems a stereotyped phrase after the experience of the 1707 Hiei earthquake which caused severe damages to Shikoku by strong ground motion and tsunami. However, descriptions in two documents (rank A' and rank B) in southeast Shikoku are interpreted that the earthquake was felt there. I conclude that the 1605 Keicho earthquake was felt slightly at least on the Pacific coast of southeast Shikoku.

Keywords: 1605 Keicho Earthquake, Shikoku, Historical Earthquake Documents, Historical Source Criticism.

### § 1. はじめに

慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)の夜、房総半島から鹿児島県までの太平洋岸を大津波が襲った。これを生じた地震の震源について、古くは大森(1913)が外房沖の近海であろうと述べ、今村(1943)は東海道・南海道の沖合と考えた。その後Kawasumi(1951)が房総沖・紀伊水道沖二元説を出し、羽鳥(1975)はそれを妥当だとした。これに対して石橋(1978)は疑問を呈し、三浦半島とされていた三崎は土佐清水市内(図1)であることなどを指摘して、南海トラフ軸に近い津波地震だった可能性を示唆した。

いっぽう飯田(1981)は、広範囲で震度5以上だったとみなし、東海沖と南海沖の二元地震で、宝永・安政・昭和の巨大地震系列と同じタイプだとした。しかし石橋(1983)は、京都でほとんど無感だったこと、淡路島の千光寺(図1)の震害は誤伝と判断されることなどを強調して、南海トラフの津波地震という解釈を改めて主張した。現在、地震調査研究推進本部地震調査委員会(2013)は本地震を南海トラフ巨大地震系列に入れて「津波地震の可能性が高い」としており、宇佐美・他(2013)も、東海沖と紀伊水道沖の二元地震で

津波地震の可能性大と考えている。Ando and Nakamura(2013)も基本的に同じ解釈を述べている。

このあと石橋・原田(2013)は、小笠原海溝沿いの巨大地震ではないかという新たな作業仮説を提出した。また松浦(2013)は、震源域を特定しなかったが、遠くない南海トラフから離れた場所で発生した可能性を考えるべきだと指摘した。このように本地震は、長い研究史にもかかわらず、いまだに基本的地震像が不明確であり、さらなる調査研究が必要である。

本地震による津波の状況は比較的良好にわかっており、石橋(2014)が既往研究結果に高知県の元もとと三崎の新たな推定結果を加えて、外房から南九州までの津波高の分布を図示している(その一部が図1に示されている)。いっぽう地震動は、石橋(2014)のまとめによれば、外房地方で強震動だった可能性があり、渥美半島先端付近でも震度2か3程度の揺れを感じたようである。しかし、京都で無感だったことはほぼ確実であり[石橋(2019b)も参照]、和歌山県有田郡(図1の広村など)と淡路島の地震動記事も疑わしい。鹿児島県も、同時代史料である「島津竜伯書状」[古代中世地震史料研究会(2017)]が大隅半島・薩摩半

\* 神戸市在住

電子メール: ishi@kobe-u.ac.jp

島の津波被害を「誠に不思議の災難」と記していることから、無感だったと推定される。

ところが四国の地震動ははっきりしておらず、その究明が本地震の震源像解明の一つの鍵を握っていると思われる。そこで本論文では、厳密な史料地震学の手法によってこの問題を議論する。

## §2. 史料の検討

石橋(2020)は本地震・津波に関する既知の全史・資料(既刊地震史料集に印刷されているものと未印刷のもの)について、一つひとつに史料等級を付した一覧表(目録)を作成した。それによると、四国について記すものは、A級(同時代)・A'級(準同時代)・B級(近世)の史料が21点、C級(明治以降)の資料が4点である。これらのなかから、元になる史料の写し(または現代語訳)、具体的な地震・津波記事のないもの、津波記事だけで地震動の考察には役立たないものを除くと、12点が残る。それらを表1に示す。

石橋(2020)の表では地震史料集ごとの通し番号を付けたが、表1では本論文の史料番号を与え、その順に並べ替えた。また、地震史料集の史料名は、史料を収載している書籍名などである場合が多く、史料名としては不適當なので、本論文では適切な史料名に直した。その際、なるべく「日本古典籍総合目録データベース」[国文学研究資料館(2020a)]の統一書名を用いるようにした。

以下で検討する**史料1~10**のテキストを図2に掲

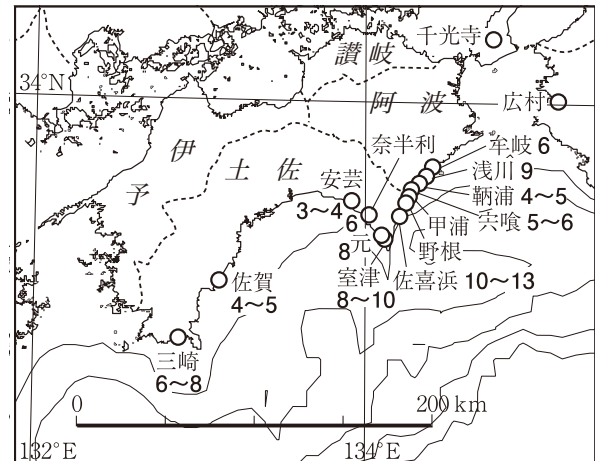


図1 本論文に関連する地名。石橋(2014)の図1-11の一部分のデザインを改変。太数字は1605年慶長大津波の津波高(m)。陸域の破線は旧国界、海域の曲線は200 mおよび1000 mごとの等深線。

Fig. 1. Index map of Shikoku Island. Modified from Ishibashi's (2014) Fig.1-11. Bold figures show the 1605 Keicho tsunami heights (in meter).

げる。これらは、地震史料集に収載されている史料であっても、その史料本文は用いず、現時点で最良のテキストと考えられるものを示した。底本は以下の各史料のところで述べる。

### 2.1 同時代史料

石橋(2020)が述べているように本地震・津波に関するA級ないしA'級の史料は少なく、本報で使えるのは以下の3点だけである。それらの記述それぞれに

表1 1605年慶長地震・津波の既知の史料で、四国の地震動の考察に使えるもの

Table 1. Historical documents pertinent to the examination of the ground motions in Shikoku due to the 1605 earthquake.

No.	Document name in the Collections <sup>1</sup>	Rank <sup>2</sup>	Title in this paper <sup>3</sup>	Remarks
史料1	M8 孝亮宿禰日次記	A	小槻孝亮宿禰記	左大史・小槻孝亮(1576-1652)の日記
史料2	M9 置文寫	A',B	阿闍梨晚印置文	津波時に土佐国崎浜に居た阿闍梨晚印の置文の写し
史料3	M16 阿波國社寺文書	A'	鞆浦大岩津波碑	阿波国鞆浦の海岸の大岩に刻まれた津波供養碑
史料4	N5 慶長九年十二月十六日大變年代書記	B	慶長九年十二月十六日大變年代書記	阿波国穴喰の「円頓寺開山住持有慶之旧記」の一部
史料5	M15 蒼屋雜記	B	蒼屋雜記	土佐藩の雜録集、「土佐国群書類従」(伝記部)所収
史料6	S6 南路志	B	南路志	土佐国の浩瀚な地誌・年譜・史料集
史料7	S2 佐賀町郷土史	C	坂本弥次郎重金記	『佐賀町郷土史』が「坂本弥次郎重金記」を引用
史料8	Ua3 大日日記開書	B	大日日記開書	阿波国穴喰の大日住持が享保六年(1721)に書記
史料9	N6 阿州穴喰浦師子吼山真福寺住僧大雲拜書 元文二丁巳年三月十四日	B	阿州穴喰浦真福寺住僧大雲拜書	阿波国穴喰の真福寺の住僧大雲が1707年宝永地震の30年後に書記
史料10	N7 海部郡取調廻在録	B	海部郡取調廻在録	天保十一年(1840)正月成立の地誌
	M22 穴喰浦舊記	B	穴喰浦舊記	本文の史料4を参照
	S10 慶長の天津波一阿波、穴喰の古文書	B	慶長九年大變年代書記	本文の史料4を参照

1, 地震史料集での史料名と石橋(2020)の表1の番号。Mは武者(1941)に、Sは東京大学地震研究所(1982)に、Uaは宇佐美(1998)に、それぞれ掲載されているもの、Nは既刊地震史料集に未掲載のもの；2, 石橋(2020)が付した史料等級；3, 本論文で用いる史料名。

ついて、四国の地震動を検討する。

**史料1 小槻孝亮宿禰記**〈おづきたかすけすくねぎ〉：  
左大史〈さだいし〉(太政官の文書管理等の責任者)を世襲した壬生〈みぶ〉孝亮(1576-1652)の日記。自筆本が伝存する期間もあるが、慶長九年は自筆本も写本もなく、慶長十年は写本のみである。刊本に、黒川春村編『歴代残闕日記』所収「左大史孝亮記抄」の影印本(臨川書店、1990)と『改訂史籍集覧』収載の翻刻「左大史孝亮記抜萃」(臨川書店、1984、復刻版)があるが、ともに粗い抄録で、本論文で問題にする記事を含まない。図2のテキストは国立公文書館内閣文庫所蔵の写本「孝亮宿禰日記 文禄四年ヨリ至慶長十年」によった。国文学研究資料館(2020b)の「館蔵和古書目録データベース」で公開されている大和文

華館(奈良市)所蔵の写本「孝亮宿禰記 文禄四五慶長二三五六十」も同文である。

本史料によれば、慶長十年正月十八日(か前日くらい)に記主が「近日」関東に大地震があったことを知ったわけだが、これは本地震のことだと断定してよい[例えば古代中世地震史料研究会(2017)によれば「近日」といえる期間に他に地震はない]。そして伊勢国や「紫国」などでも大地震があったと伝聞した。「紫国」は、山本・萩原(1995)は「四国」とし、矢田(2009)は、筑紫国のことなのかどうかははっきりしないとしている。もし筑紫国だとしたら、九州の強震動の唯一の記録となるが、§1で触れた一次史料の「島津竜伯書状」と矛盾し(筑紫国で大地震ならば鹿児島でも有感になる場合が多いだろう)、誤った伝聞ないし記載と考

<p>【史料1】小槻孝亮宿禰記 〈慶長十年正月〉 十八日巳 近日関東大地震有之 死人等多云々 又伊勢國紫國等有大地震云々</p>	<p>【史料2】阿闍梨曉印置文 于時慶長九甲辰國々諸難立起事 〈中略〉 于時慶長九年甲辰〈中略〉四番に十二月十六日夜 頓而地しんす。其時夜半はかりに四海浪の大塩入 て、國々の浦々を破損し、崎濱にも男女五十人余 浪に死。御代官下代に津の國山田助右衛門殿と申 侍、夫婦子浪二被取、朝の露ときへ給ふ。あはれ 哉、かなしひ哉。東寺西寺の浦々は男女四百人余 死。甲浦は三百五拾人余死、穴喰二は三千八百六 人余死。此時野根の浦ハ佛神三寶の加護にやあら ん、塩不入、大成不思議也。東を請南を請たる國 は大汐入、西を請北を請たる國々は心動地しん計 二而塩いらず。是を未來永々の言傳二書置もの也。 一右之時、在所庄屋安岡吉右衛門也、此一類ハ少 しも取おとし無之、未繁昌に安穩也。談議所に 讃岐國福家ノ住人権大僧都曉印と申客僧居合申 有為目を見、則此置文作る筆者也。汐の入所ハ、 談議所の阿弥陀堂のつめ木の上迄入、中里かち 次郎右衛門つぼ迄入、河ハ船場の名本の出川原 迄入。八幡の大権現のらんかんの北橋を打つふ るなり畢。</p>	<p>敬白右意趣者人王百拾代御宇慶長九甲辰季拾 二月十六日未亥剋於常月白風寒凝行歩時分大 海三度鳴人々巨驚拱手処逆浪頻起其高十丈來 七度名大塩也剩男女沈千尋底百餘人 為後代言傳奉興之各々平等利益者必也</p>
<p>【史料3】鞆浦大岩津波碑 南無阿弥陀佛</p>	<p>【史料4】慶長九年十二月十六日大變年代書記 乙巳正月廿一日に相尋ね書き記し候 一 慶長九年十二月十六日大變年代書記 〈中略〉 一 当浦慶長九年十二月十六日に辰半刻より申上 刻まで大地震にて前代見聞の大變、同西の上刻 月の出の頃より大浪海底すさまじく惣所中の泉 より水わき出、さてさて言語を絶する大變。其の 頃面々等も遁去る所、寺より申の方に当り古城 の小山有り是れへにげ去る。人数百七十余人な り。それも老人または幼少人は道にて浪に打ち たおされ皆々流死す。〈後略〉</p>	
<p>一 慶長九年甲辰十二月十六日夜亥ノ時三崎浦大 潮指浦中男女百五十三人死</p>	<p>【史料5】蒼屋雜記 宿毛齊原治右衛門貞享三丙寅年六月伊南筋旧記聞 合覽書抄 〈中略〉 三崎香佛寺 一 豊様御國御拝領被遊為請故前修理様山内備 後殿慶長五年御越同六辛丑年 一 豊様御入國 也</p>	

(to be continued)

図2 本論文で使用する地震史料の最善のテキスト  
Fig. 2. Texts of historical documents used in this study.

【史料6】南路志

願船寺真宗東本願寺末

寺記云建立ハ慶長年中ニ泉州境之商人仏千十郎と申福人之末子三太夫と云もの商売に付当浦へ来有付居候時本尊を請来安置（以下は2行割だが1行で記す）然ニ慶長九辰年 地震大潮入候砌 右三太夫本尊の守護により不思議に相助り申に付 浦人右本尊を尊信之者出来自然と其家を道場と申ならはし候 然共俗家にて僧形のもの無之寺役相勤不申其時より浮津浦に居住無違延宝年中室津湊御結講被仰付候節当寺地に移 元禄年中 寺堂御改之節御公儀江正海と法名字に書付差上申候其後正徳卯年本願寺より願船寺と申寺号申請代々相統仕也

【史料7】坂本弥次郎重金記

慶長九年極月十六日地震潮入の時浜崎にあり、母を背負いて城山に逃る。祖先巻物、知行折紙、元親公の書簡等旧記悉く流失す。

【史料8】大日旧記聞書

一 乗山惣持院 大日寺住持恵口之れを書記す  
時に享保六辛丑七月十五日入院

大日旧記聞書

御口口口口并寺物御証文縁起聞書

〈中略〉

御上より住持仰付させられ治国利民の法 修行すべき旨 御折紙御法度書 即ち御守御本尊普賢菩薩之絵像御渡し遊ばされ候得共慶長九年十二月十六日地震大浪に寺社町家流失 大切なる御証文それより失し 万茶羅涅槃像御守御本尊一器に有て

海部の海上に浮び獵船ひらい大日寺へ送る

慶長九庚辰十二月十六日地震大浪日比原在迄流失時代の住持溺死榮融と申す也 隠居宥伝再住翌年当寺御建立也 其の時 宥伝古来の伝記 当寺の旧記 具にこれあり候得共 宝永年中の地震大浪寺半分打くずれ仏道具旧記伝起の帳面流失本尊過去帳取りにげ其の内に口口二ツ有り御証文残り有り万茶羅涅槃像口 蓬庵様御守御本尊は床に懸り有て流し其の年の十二月三日にひらいし人 芥付村治郎左衛門 磯にてひらいし由〈後略〉

〈後略〉

【史料9】阿州穴喰浦真福寺住僧大雲拜書

宝永四丁亥年十月四日震潮浦々溺死するもの数へがたし〈中略〉その昔の大変は慶長九甲辰年十二月十六日戌刻洪波来たる浦は勿論正田村まで一家も残らず人死すること夥し〈中略〉慶長の大変こそ言うもおろかや波の入る前つがた所々の井の水おのずと乾き湊口より水床の沖まで乾きて水一滴もなき干潟となりけるとぞ今願行寺辺の六地藏のもとに古き石あり其の時のことあらあら刻記せりといへども石の上下欠損して文義全からず慶長十乙巳年正月に記せる年号明らかなり その文の中に半時ゆりと書けり その上の文は闕けたりしかれば此の時も地震せる歟 今古老の言い残せる言を伝えるもの申すは その洪涛十六夜の出目を隠して山より高く込み入りける浜辺に竹藪の有りける所にて波一ツ折けるにこそ その勢すこしは弱くなれり諸人右往左往逃げ迷うもの悉く底の藻屑となる小山ににげあがるもの百余人は助かりけるよし その山の八分目まで波上がり波の打ち

来たるごとに諸人同音に泣き悲しむ声ばかりにて

活きたる意地は無かりけるとぞ嗚呼〈中略〉慶長九年より今元文二年迄百三拾四年におよびても語り伝うるなれ不定の世界に何も定まる事なしといえども取りわけ海辺の住居は  
〈以下は日誌とのこと〉

【史料10】海部郡取調廻在録

浅川村

此浦は慶長已前ハ荒地にて磯ヶ浦の内なりしか、磯ヶ浦ハ千余軒の氏戸有しか、慶長九年の震災にこと／＼く損亡しけれハ、此荒地を開立、浅川浦と名付しと云ふ

神社 天満宮 棟札写し

〈中略〉 慶長八季辛卯九月吉日遷宮

裏書 (虫損) 人死メ合三千人アマリ、大カウ海部友ニ入塩、町半トナカレ候也、人死メ五百人、但大カウ 一浅川村迄半トナカレ里 伊勢田井ノ谷マテ入候 一牟岐島ハ東ノ浜流人ハ不死候 一土州甲浦ユキヲカキリ海部之内ヲカキツテ大ニイタムト申計也  
筆者 海部頼 東光寺住持恵桂座尤書

凡例

- 1 各史料の底本は本文に記す。
- 2 できるだけ底本に忠実な体裁にしたが、ソフトの制約でできなかった部分がある。
- 3 〳〵の記述は本論文の著者・石橋による。



えられる。

四国だった場合は、四国のどこかが問題になろうが、四国のどこで強震動があっても、石橋(2019b)が詳しく論じたように、京都で無感だったことと矛盾する。さらに、伊勢国と四国が同時に「大地震」であれば京都は必ず有感になると考えられるから、史実に反する。したがって、本史料の記述は誤った伝聞ないし記載だと判断せざるをえない。あるいは、「大地震」という言葉が、津波を含めた総称として無雑作に使われたのかもしれない。いずれにしても本史料は、四国の強震動の証拠にはならないと判断される。

**史料2 阿闍梨暁印置文**〈あじやりぎょういんおきぶみ〉：本津波時に現室戸市佐喜浜町〈さきはまちょう〉(図1)に滞在していた旅僧・暁印の置文(書き置き)を後の人が書き写して加筆したものである。津波直後の貴重な同時代史料とされているが、暁印の自筆原本も最初の写し原本も失われており、江戸時代中期以降の複数のテキストしか残っていない。それらを石橋(2019a)が詳しく検討し、原本に近いと考えられる校訂版を提示した。図2は、それを一部省略したもので、既刊地震史料集のM9(表1)とは有意に異なっている。

図2の最後の8行は明らかに後人の加筆だが、石橋(2019a)は庄屋の名前から、その原文が1650年頃に書かれたと推定した。前の部分の原文は暁印が慶長十年初期頃までに書いたと推測されるが、後人がどれほど忠実に書写したか(あるいは暁印の自筆原本に追記したのか)不明である。それをくり返し書写したものしか伝わっておらず、その間の変化を否定できないから、史料等級はA'級ないしB級と判定される。

以上を踏まえて史料を読むと、「十二月十六日夜頓而地しんす」というのは、暁印が崎浜で地震の揺れを感じたと解釈される。しかし必ずしも強い揺れではなく、やや長く揺れたようなニュアンスである。各地の死者は津波によるのだろう。ただし宍喰〈ししくい〉の死者は明らかに過大で[石橋(2019b)も参照]、暁印の原文のままかどうか疑われる要因の一つである。

「西に面し北に面した国々は地震の揺ればかりで津波はなかった」というのは、そういう地形が四国の東～南部にはないから、四国西部や北部(あるいは四国外)で地震の揺れがあったと解釈される。後世の書写のくり返しの過程で記述が変わっていった可能性を排除できないが、本史料からは、佐喜浜を含む四国のあちこちで有感だったことを否定はできない。

**史料3 鞆浦大岩津波碑**〈ともうらおおいわつなみひ〉：徳島県海部〈かいふ〉郡海陽町〈かいようちょう〉鞆浦(図1)

の海浜の大岩に刻まれた本津波の碑である。以前から有名だが、最近徳島県教育委員会(2017)の詳しい報告があり、石橋(2019b)が議論している。図2のテキストは同報告の拓本写真と翻刻による。建立時期は寛文四年(1664)[猪井・他(1982)]ともいわれるが、徳島県教育委員会(2017)は不詳としている。

碑文は、「亥刻(22時頃)月が白く風が寒く歩行が凍りつくような時分、大海が三度鳴った。人々が大いに驚いて手をこまねいているところへ逆巻く波が押し寄せ、云々」と述べている。石橋(2019b)は、「後の代に言い伝える為に興し奉る」と彫られていることから、災害の記憶が深く刻まれた被災者たちが、亡くなった仲間を慰霊し、後世に伝えるために作ったと考えた(よってA'級)。そして、碑文からは、前触れとなるような大地震はなく、人々が無防備だったところに津波が襲来したことが窺えるとして、それがこの地域の共有の記憶だったのではないかと述べている。本論文でもそのように考え、海陽町付近では注目されるような揺れはなかったと判断する。

## 2.2 後世の参考史料

石橋(2019c)が論じた1596年伊予・豊後地震のように同時代史料だけで歴史地震像の検討ができるとよいのだが、本地震・津波は同時代史料が非常に少ないので、江戸時代末までに書かれたB級史料や明治以降のC級文献も注意深く吟味したうえで参考に供する。地震史料集には、著者が根拠なく「大地震、大津波」と書いた明治以降の郷土誌の類が多数あるが、それらは石橋(2020)がD級として棄却した。

**史料4 慶長九年十二月十六日大變年代書記**〈…たいへんねんだいしよき〉：徳島県海陽町宍喰浦(図1)にあった円頓寺〈えんどじ〉(1912年に大日寺に合併)で、元文四年(1739)に発見された慶長～寛永頃の旧記類を書写したものが「円頓寺開山住持宍慶〈ゆうけい〉之旧記」で、その中に本史料がある。表1のS10は別史料だがほとんど同文であり、M22はやや簡略化されたものである[石橋(2019b)]。

津波に被災した住持・宍慶が当日から筆記を続け、翌年正月二十一日にとりまとめたと書かれており、貴重な同時代史料とされてきた。しかし石橋(2019b)が詳しく検討し、多くの具体的な矛盾点を指摘して、史料価値に疑問を呈した。何らかの記録や伝承を踏まえてはいるのだろうが、「円頓寺開山住持宍慶之旧記」全体が、元文四年の改竄や(一部)創作すら疑われる[石橋(2018)も参照]。そこで石橋(2020)はB級とし

た。図2のテキストは石橋(2019b)によるが、かなり長文のうちの必要な一部分だけである。

本史料は、津波当日の辰半刻より申上刻まで(8～15時頃)「大地震にて前代未聞の大変」と述べている。しかし石橋(2019b)は、この地震活動は疑わしく、本当だったとしても宍喰直近の局地的な群発的活動が偶然この日に発生したのだらうと結論した。昼間の大地震の記述とは反対に、津波の前の地震動は何も記していない。本史料からは、宍喰では津波に直接関係する地震動はなかったと判断される。

**史料5 蒼屋雜記**〈そうおくざっき〉：土佐藩・高知県・明治政府の村役人・官吏を勤めた吉村春峰〈しゅんぼう〉(1836-81)が、明治初年に『群書類従』に倣って編纂した土佐国の一大史料叢書『土佐国群書類従』の、巻五十三「傳記部十五」に収録されている。この記録がいつ頃、誰によって書かれたものか、吉村がいつ、何から採録したのかは不明だが、享保年間(1716-35)頃までの土佐藩の雑多な記録集である。図2のテキストは国会図書館蔵『土佐国群書類従 五十三』(東京図書館旧蔵写本)を筆者が翻刻したもので、高知県立図書館(2003)も参照した。

当該記事は、宿毛くすくも(現高知県宿毛市)の斉原治右衛門なる人物が貞享三年(1686)に伊南いなん筋の旧記を聞き取った覚書の抄録に出てくる。「伊南」は、ふつつ「以南」「渭南」と書き、ほぼ現在の高知県土佐清水市～大月町の一帯を指す。

三崎香佛寺(土佐清水市三崎〔図1〕に現存)の条にある記事は、海水が押し上げて153人の死者がでたことだけで地震は記していない。聞書の短いメモだから断定はできないが、史料3の鞆浦と同様、少なくとも強い揺れはなくて人々が無防備だったところを夜10時頃に突然津波に襲われ、多くの死者を生じたことが、地域の共通の記憶になっていたと解釈される。

**史料6 南路志**〈なんろし〉：高知城下の豪商で篤学者の武藤致和〈むねかず〉(1741-1813)が子の平通〈ひらみち〉(1778-1830)とともに編纂した土佐国の浩瀚な地誌・年譜・史料集で、文化十二年(1815)に完成した。閩国〈こうこく〉編の安芸郡浮津村(現室戸市)の願船寺の項に本史料が掲載されている。図2のテキストは高知県文教協会が翻刻した『南路志 閩国之部 上巻』〔武藤(1959)〕による。

「寺記云」が一見寺の古記のように聞こえ、「地震大潮入候砌」という記述から、地震動があつて津波が来たようにみえる。しかし、「寺記云」「社記云」という語句は『南路志』に非常に多く、同書編纂前から各寺社に

あつた旧記ではなくて、編者・武藤による問い合わせへの回答の可能性がある。実際、願船寺の「寺記」は、「正徳卯年」(正徳元年, 1711)のあと「代々相続仕也」と述べているから、正徳元年のかなり後に書かれたことが明らかである。

土佐国に甚大な地震動・津波被害を与えた1707年宝永地震津波を経験したのち、同国の人々の間に「地震・津波」をセットにした認識が定着し、揺れを感じなくても「地震大潮」と書かれた可能性も考えられる。したがって、浮津村付近が無感だったとは言えないが、本史料から同所で有感だったとも結論できない。

**史料7 坂本弥次郎重金記**〈さかもとやじろうしげかねき〉：『佐賀町郷土史』〔大塚(1965)〕の「十一、天災(1)地震」の「慶長の大地震」の項に、「佐賀坂本家の記録によれば」として図2のテキストが引用されている。佐賀町(図1)は現在は高知県黒潮町である。『佐賀町郷土史』はC級の資料だが、著者の筆ではない本史料を無視はできない(いちおうB級と想定)。

しかしながら、「坂本弥次郎重金記」の情報はなく(高知県立図書館でも不明)、記主や成立年代もわからない。もし同時代史料かそれに準ずるものであれば、「地震潮入」という表現から、当時の佐賀で地震の揺れを感じた可能性がある。けれども、『土佐名家系譜』〔寺石(1942)〕の「佐賀 坂本氏」の「坂本弥太郎」の項に「(前略)後山内氏に仕へ佐賀に永住す慶長九年大潮家實記録流失す」とあり、「坂本弥次郎重金記」の史料価値が疑われる。宝永地震津波後に作られたとすれば、前項同様の可能性もある。

**史料8 大日旧記聞書**〈だいにちきゅうきききぎき〉：宍喰の大日寺の住持が享保六年(1721)に書いたもので、同寺が所蔵しているという。猪井・他(1982)が翻刻を掲げている。全文は長いので、図2には関連部分のみを示す。『徳島県南海地震史料集』〔徳島県南海地震史料調査委員会(2017)〕によって補訂した。

慶長九年の事象について「地震大浪」という字句が2回出てくる。しかし、1707年宝永地震津波の記憶がまだ生々しい時期に書かれたものであり、史料6で述べたように「津波」といえば「地震」が枕詞のように付いたかもしれない。少なくともこの史料から慶長九年津波の際に宍喰で地震動を感じたと断定することはできないと考える。

**史料9 阿州宍喰浦真福寺住僧大雲拝書**〈あしゅうししくいらしんぷくじじゅうそうだいうんはいしよ〉：宍喰の真福寺(1912年に大日寺に合併)の住僧・大雲が元文二年(1737)に書いたもので、猪井・他(1982)が翻刻

を掲げている。図2のテキストはそれによるが、一部を省略した。

石橋(2019b)が論じたように、津波の時刻や津波直前の現象に関して、同時代史料とされる**史料4**が他の史料と異なっていたり不自然だったりするのに対して、本史料が記す伝承は不自然な点がなく事実に近いようにみえる。「慶長十乙巳年正月」と記した古い石碑があって、上下欠損で文義不詳だが「半時ゆり」と書かれているというのも、信用できると考えられる。「半時ゆり」という字句も無視しないほうがよいだろう。すなわち、この史料は、津波の前に宍喰では長時間の揺れ(「半時」は約1時間)が感じられたことを示唆している。記された言い伝えには震動のことはないので、強震動ではなかったと推測される。ただし、100年以上のちのB級史料であることには留意すべきである。

**史料10 海部郡取調廻在録**くかいふぐんとりしらべかいざいろく：野口年長らが阿波藩内を実地調査して作成した地誌で、未定稿の写本として伝えられた。天保十一年(1840)の成立である。山本・萩原(1995)がその記述を検討しているが、図2のテキストは徳島の古文書を読む会一班(2017)によった。

浅川村(現徳島県海部郡海陽町浅川;図1)の慶長九年の津波被害を述べ、引用されている天満宮の棟札裏書が海部郡内の津波被害を記している。地の文に「震汐」という言葉がみえるが、200年以上前のことを簡単に述べているだけだから、この言葉から浅川村付近で津波の前に地震動を感じたとは結論できない。

### §3. まとめと結論

慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)夜の大津波の際の四国の地震動を明らかにするために、既知の全史・資料のなかからその検討に役立つものとして、AないしA'級(同時代または準同時代)史料3点、B級(同時代ではない近世)史料7点(うち1点はC級[明治以降]資料所収)を選別し、一つずつ吟味した。

**小槻孝亮宿禰記**(A級)の記述は四国の強震動の証拠にはならず、宍喰の**大変年代書記**(B級)からも同所で強震動があったとは言えない。**鞆浦大岩津波碑**(A'級)と**蒼屋雑記**(B級)の記述は、鞆浦と三崎で記憶に残る地震動がなかったことを示唆する。**南路志・坂本弥次郎重金記・大日旧記聞書・海部郡取調廻在録**(いずれもB級)の記事は「地震」(または「震」という字句を含むが、地震の揺れがあったことを意味しているわけではない可能性がある。

いっぽう、**阿闍梨暁印置文**(A'級ないしB級)の記

述からは、佐喜浜や四国内のどこかで地震の揺れが感じられたと判断される。**真福寺住僧大雲拜書**(B級)も宍喰の地震動を示唆している。ただし、どちらからも強震動というイメージは感じられない。

結論として、四国に関しては、京都のようにほぼ確実に無感だったとは言えず、地点は特定できないが(佐喜浜と宍喰は含まれるか)、ある程度の地震動が感じられたと判断される。

本地震全体としては、外房地方である程度の強震動、東海地方と四国(の太平洋岸か)で強くない揺れ、京都と鹿児島地方でほぼ無感だったことになる。

### 謝 辞

徳島県立文書館の金原祐樹氏から『徳島県南海地震史料集』と『史料集 阿波海部取調録』をご提供いただいた。オーテピア高知図書館高知資料デスク担当の坂本靖氏は「坂本弥次郎重金記」を調べてくださった。匿名の査読者のご意見は本稿の改善に有益だった。編集担当の白石睦弥氏にもお世話になった。以上の方々に感謝いたします。

対象地震:1605年慶長地震津波

### 文 献

- Ando, M. and M. Nakamura, 2013, Seismological evidence for a tsunami earthquake recorded four centuries ago on historical documents, *Geophys. J. Int.*, **195**, 1088-1101, doi:10.1093/gji/ggt270.
- 羽鳥徳太郎, 1975, 明応7年・慶長9年の房総および東海南海道大津波の波源, 東京大学地震研究所彙報, **50**, 171-185.
- 飯田汲事, 1981, 歴史地震の研究(4)慶長9年12月16日(1605年2月3日)の地震及び津波災害について, 愛知工業大学“研究報告”, No.16, 159-164.
- 今村明恒, 1943, 慶長九年の東海南海両道の地震津波に就いて, 地震1, **15**, 150-155.
- 猪井達雄・澤田健吉・村上仁士, 1982, 徳島の地震津波一歴史資料から一, 徳島市立図書館, 244 pp.
- 石橋克彦, 1978, 1605年慶長大地震の震源域について—南海沖・房総沖2元説への疑問—, 地震学会講演予稿集1978, No.1, 164. <https://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/1605KeichoEq78.pdf>



- 石橋克彦, 1983, 1605(慶長9)年東海・南海津波地震の地学的意義, 地震学会講演予稿集1983, No.1, 96. <https://historical.seismology.jp/ishibashi/archive/1605KeichoEq83.pdf>
- 石橋克彦, 2014, 1605年慶長九年地震, 石橋克彦「南海トラフ巨大地震—歴史・科学・社会」, 岩波書店, 52-58.
- 石橋克彦, 2018, 永正九年(1512)六月九日の地震と同年の穴喰洪浪に関する諸問題—1498年明応東海地震と対をなす南海地震に関連して—, 歴史地震, 33号, 157-166.
- 石橋克彦, 2019a, 1605年慶長津波を記す「阿闍梨曉印置文」の史料批判, 歴史地震, 34号, 31-40.
- 石橋克彦, 2019b, 1605年慶長大津波に関する阿波国穴喰の地震・津波記録の検討, 歴史地震, 34号, 115-126.
- 石橋克彦, 2019c, 同時代史料による文禄五年閏七月九日(1596.9.1)の伊予・豊後地震, 地震2, 72, 69-89.
- 石橋克彦, 2020, 1605年慶長地震・津波に関する既刊地震史料集の全史・資料の目録(史料等級を付した表), 歴史地震, 35号, 67-75.
- 石橋克彦・原田智也, 2013, 1605(慶長九)年伊豆-小笠原海溝巨大地震と1614(慶長十九)年南海トラフ地震という作業仮説, 日本地震学会講演予稿集2013年度秋季大会, 108.
- 地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2013, 南海トラフの地震活動の長期評価(第二版), [http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13may\\_nankai/nankai2\\_shubun.pdf](http://www.jishin.go.jp/main/chousa/13may_nankai/nankai2_shubun.pdf)
- Kawasumi, H., 1951, Measures of earthquake danger and expectancy of maximum intensity throughout Japan as inferred from the seismic activity in historical times, Bull. Earthq. Res. Inst., Univ. Tokyo, 29, 469-482.
- 高知県立図書館(編), 2003, 土佐国群書類従, 第五卷, 高知県立図書館, 514 pp.
- 古代中世地震史料研究会, 2017, [古代・中世]地震・噴火史料データベース(β版), 最終更新日2017年3月15日, <https://historical.seismology.jp/eshiryodb/>
- 国文学研究資料館, 2020a, 日本古典籍総合目録データベース, 最終更新日2020年1月31日, <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/>
- 国文学研究資料館, 2020b, 館蔵和古書目録データベース, 最終更新日2020年1月30日, <http://base1.nijl.ac.jp/~wakosyo/>
- 松浦律子, 2013, 1605年慶長地震は南海トラフの地震か?, 第30回歴史地震研究会(秋田大会)講演要旨集, 25.(歴史地震, 29号(2014), 263に再録)
- 武者金吉(編), 1941, 増訂大日本地震史料, 第1巻, 文部省震災豫防評議会, 950 pp.(復刻, 日本地震史料, 第1巻, 2012, 明石書店)
- 武藤致和(編著), 1959, 南路志 闔国之物 上巻, 高知県文教協会, 550 pp.
- 大森房吉, 1913, 慶長九年, 相, 武, 房, 總ノ大地震, 本邦大地震概説, 震災豫防調査會報告, 68号乙, 8-10.
- 大塚政重, 1965, 佐賀町郷土史, 佐賀町教育委員会, 78 pp.
- 寺石正路, 1942, 土佐名家系譜, 高知縣教育會, 930 pp.
- 徳島県教育委員会(編), 2017, 南海地震徳島県地震津波碑調査報告書, 徳島県埋蔵文化財調査報告書第3集, 徳島県教育委員会, 162 pp.
- 徳島県南海地震史料調査委員会(編), 2017, 徳島県南海地震史料集, 徳島県立文書館, 250 pp.
- 徳島の古文書を読む会一班, 2017, 史料集 阿波海部取調録, 徳島の古文書を読む会一班, 116 pp.
- 東京大学地震研究所(編), 1982, 新収日本地震史料, 第2巻, (社)日本電気協会, 582 pp.
- 宇佐美龍夫(編), 1998, 「日本の歴史地震史料」拾遺, (社)日本電気協会, 520 pp.
- 宇佐美龍夫・石井 寿・今村隆正・武村雅之・松浦律子, 2013, 日本被害地震総覧 599-2012, 東京大学出版会, 722 pp.
- 山本武夫・萩原尊禮, 1995, 慶長九年(一六〇五)十二月十六日地震について—東海・南海沖の津波地震か, 萩原尊禮(編著)「古地震探求—海洋地震へのアプローチ」, 東京大学出版会, 160-251.
- 矢田俊文, 2009, 一六〇五年の慶長地震, 矢田俊文「中世の巨大地震」, 吉川弘文館, 156-162.